

「壊せば、報酬二倍……」

応募画面の一文を眩き、目の前の雑居ビルを見上げた。駅から歩いて十分ほどの裏通り。

一階はシャッターの下りた金物屋で、二階の窓から白い作業灯だけが漏れている。看板も受付もない。

階段の脇に『試作物モニター募集』と印刷された紙が貼られているだけだった。求人サイトで見つけた、高報酬の単発仕事だ。

内容は「開発中の全身拘束具の耐久テスト」。応募条件には、妙な一文があった。

『カントボーイの方限定』

最初は悪戯だと思った。だが、返信は事務的だった。入力項目が箇条書きで並んでいた。身長、体重、骨盤の幅……。

画面に打ち込んで消し、また打ち込んだ。送信後もしばらく指先が冷たかった。

それでも、高い報酬に負けて応募した。基本報酬

とは別に、追加報酬をもらえる条件も書かれていた。

『自力解除または器具の一部破損で、基本報酬と同額を追加します』

『両方を達成した場合も、追加額は変わりません』

拘束されたまま暴れて、留め具か縫い目を壊せば金が増える。簡単すぎる。体力には自信があった。応募時の備考欄には『壊して追加分まで持って帰ります』とまで書いた。

当選メールには、短く『期待しています』と返されていた。

階段を上がりきると、鉄扉が十センチほど開いていた。インターホンを探しているあいだにも、中から金属を打ち合わせる硬い音が聞こえる。扉を押すと、作業灯の下に男が二人いた。

二人のあいだには細長い金属の枠が置かれている。一人は作業着姿で、工具を握ったまま縫い目を覗き込んでいた。もう一人はカーディガン姿で、タブレットと金属の枠を見比べている。

「小川凌です。耐久テストに来ました」

先に顔を上げたのは、タブレットを持った男だった。猫っ毛の髪を指で払い、僕ではなく壁の時計を確認する。

「予定より三分早い。いいね。早川圭介。進行と計測を担当する」

愛想は期待していなかった。それでも挨拶より先に時刻を確認され、僕はわずかに面食らった。早川さんは僕の反応には構わず、応募用紙を画面へ呼び出す。

「備考欄に、壊して帰るって書いたのは君？」

「書きましたけど」

「口だけじゃないと助かる。今日は、この器具がどこまで耐えられるか確かめたい」

穏やかな声には、挑発が混じっていた。作業着の

男もやっと工具を置き、金属の杵越しに僕を見る。

背が高く、肩幅も腕も太い。笑わない目が、僕の肩や腰、脚の太さを順番に確かめていった。

「黒田慎吾。これを作った。壊せるなら壊してみろ」

声は低く、平坦だった。必要なことしか話さない。その視線に、全身を測られている気がした。緊張して上がっている肩の位置や、鞆を握りしめている指の白さ。

細かな反応まで見抜かれていた。

「……言いましたね。追加報酬、絶対に払ってもらいますから」

「本当にどこか切れたらな」

初対面の相手に引き下がるのは癪だった。黒田さんの一言で、緊張より負けん気が勝った。

早川さんは僕と黒田さんを交互に見て、楽しそうにタブレットへ何かを打ち込んだ。

フロアは想像していたより整っていた。白い作業台と、番号を振られた棚。並んでいるのは金属の枠と幅の広いベルトばかりで、いかにも下品な道具には見えない。

黒田さんが金属のつなぎ目を一つずつ叩く。早川さんはそのたびに番号を読み上げ、検査表へ印をつけていった。

僕を安心させるための確認ではない。これから本当に、壊れる寸前まで力をつけるのだ。ここで、高い報酬の意味を悟った。

「今日試すのは、全身を固定する器具だ。手首と腰、膝、足首をベルトで留めて、股下は金属の枠で支える」

「体を暴れさせるために、外から当てる振動器具を三つと、ナカへ挿れる器具も使う」

そこまで言って、黒田さんは僕の顔をまっすぐ見た。

「お前が申告した内容も、こちらに来ている」

「……全部ですか」

「全部だ。骨盤の幅も、クリトリスが弱いことも、
膝の裏を触られると足が跳ねることも」

淡々と告げられ、喉が鳴った。他人の口から聞くと、裸にされた気分だった。早川さんが僕の様子を見て、にこりと笑った。

「応募書類に書いてもらった内容が実際の体と合っているか、まずこっちで測るよ」

「……はい」

「話はそれからにしようか。ね、黒田さん」

「採寸が済んだら、すぐ装着する」

早川さんに促されて靴を脱ぎ、壁際の測定器へ立った。身長と体重を確認されたあと、黒田さんがメジャーで骨盤の幅と太ももの太さを測る。

早川さんは応募時に書いた数値と見比べ、すべて一致、とタブレットへ入力した。

渡された白湯を飲みながら説明を聞いた。手首、腰、膝、足首をベルトで固定する。激しく動いてもずれないか、縫い目がほつれないかを調べる。試験項目を追い、気になった点を尋ねた。

「……刺激確認用って、なんですか」

「ああ、それね」

早川さんが、用紙に記された試験手順を指でなぞった。

「ベルトで固定したまま、思いきり暴れてもらうよ。体を動かすと、敏感なところが器具に擦れる。その刺激で暴れても、ベルトや縫い目が壊れないか確かめるんだ」

続いて黒田さんが、用紙を指で軽く叩く。

「だから先に、どこを触られると一番大きく動くのか調べる」

細かな反応まで見られるらしい。

「率直に言う。お前の体がどれだけ動くかを見せてもらう」

「気持ちよかったかどうか、ちゃんと教えてね」

「……っ、はあ」

自然に言われ、一瞬理解が遅れた。気持ちよかったかどうか。僕を感じる前提の話に、耳の裏が熱くなった。言い返そうとしたが、情けない声しか出なかった。

「……拘束されたまま暴れるだけなら、簡単ですけど」

「簡単？」

「僕、体を動かすのには自信があるんで。むしろそっちの器具がもたないんじゃないですか」

「ふうん」

「追加報酬、いただきますよ」

早川さんは目を細め、タブレットへ『壊すと宣言』と入力した。黒田さんは表情を変えず、金属の杵を一度だけ叩く。

「今の言葉、最後まで撤回するなよ」
「そっちこそ、壊れてから言い訳しないでください」
「交渉成立。小川くんが器具を壊すか、黒田さんの器具が最後まで耐えるか。勝負だね」

フロアの奥にある試作組み立て用の部屋。その扉を開けると、白いテーブルと、その上に組み上げられた金属の杵が置かれていた。

杵の四隅からは幅の広いベルトがぶら下がっている。見ただけで、これからの格好を察した。

「……脱ぐんですか」

口にしてから後悔した。早川さんは待っていたようにうなずいた。